

Title	国際社会学と三田スクール
Sub Title	Transnational sociology and the Mita school
Author	吉野, 耕作(Yoshino, Kosaku)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.60- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：移民の市民的統合の内実：政治社会学的地域研究の視座から
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際社会学と三田スクール
Transnational Sociology and the Mita School

吉野 耕作

1. ナショナルな社会学を超えて

近代社会学は「国民国家」の枠組みに縛られる形で誕生し、展開してきた。長い間、社会学の主流は自国社会を考察の対象とするようになり、隣接する人類学でも特定の国・社会の専門家を訓練することに関心が集中していた。その結果、社会に関する知識を「国民国家」単位で整理する習慣が定着した。その意味において、近代社会学（および人類学）はナショナリズムの思考法と親和的であった。

このような社会学のあり方を問題視する傾向が目立つようになったのは 1980 年代のことである。たとえば、ひとつの試みとして、マイケル・マンはソサイエティという概念そのものに挑戦して、社会学の主流からの問題提起を行った。人間の活動が国民社会のような特定の領域によって拘束されるという前提は歴史的に見て成り立たない、そのような考え方は間違いであると論じた。征服、戦争、貿易などのあり方を見れば、孤立した一国社会は歴史的現実として存在しなかった。したがって、マンは「人間はソーシャルではあるが、ソサイエタルではない (human beings are social, not societal)」と述べた (Mann 1986 : 14)。その上で、ソーシャルなるものの本質を、重なり合い交錯する複数の権力のネットワークととらえ、社会学がめざすべき課題として複数の権力をめぐる人間と人間の関係の分析を設定した。なかでも、権力ネットワークの束ねが「国境」を超えて幾重にも交錯する状況に焦点をあて、古代から今日にいたるまでの世界史の再解釈を通して分析した (Mann 1986 ; 1993 ; 2012 ; 2013)。マンは、既存の社会学の前提であった「ソサイエティ」概念への挑戦を通して、トランスナショナルな現実に対してきわめて重要な示唆を残した。

次に取り上げたいのは、日本の状況に特殊な展開である。伝統的なナショナルな社会学のあり方に再考を促す試みが 1980 年代に登場した。NGO や移民・移住、エスニシティ、新しい社会運動など国民国家の枠を超えるさまざまなアクターや減少の研究として現れた。後に、国際社会学と呼ばれるようになった分野である。

国際社会学を大学の教育プログラムの中に導入したのは故馬場伸也氏 (1937-1989) である。国家というアクターを与件として国際関係を論じていた国際政治学会やナショナルな志向がきわめて強かった日本社会学会において異端児的役割を演じて、『アイデンティティの国際政治学』(1980) や『地球文化のゆくえ——比較文化と国際政治』(1983) などを著した。グローバル・カルチャーなる用語が英語圏でもはやされるようになったのは 1990 年代の半ばであるが、そのずっと前に同概念を提示した馬場氏の洞察力はずば抜けていた。トランスナショナル

な研究の方向性を示す先駆的な試みであった。1980年代初頭、馬場氏が教授をされていた津田塾大学には、東京大学の社会学研究室出身の若手の研究者であった小倉充夫氏と故梶田孝道氏がいた¹⁾。馬場氏に触発されたお二人は、馬場氏亡き後、国際社会学という分野を制度化する上で中心的な役割を演じることとなった。1990年代前半のことである。

馬場氏によれば、国際社会学とは、第1に「国際関係および民際関係を社会学の理論・仮説・手法を用いて分析しようとする学問体系」としての「国際・社会学」、第2に「国際社会を1つの有機的実体としての社会として把握し、その発展・運動の形態や構造を研究し、国際社会の諸問題を解決しようとする学問」としての「国際社会・学」である（馬場 1993）。加えて、第3に、小倉氏が提唱するように「社会学的アプローチによる地域研究を国際関係と関連づけの中で行うこと」である（小倉 1996：84）。国際関係の側面が強調されたのは、国際社会学が社会学部・学科というよりは国際関係学部・学科の枠組みの中で開講される傾向があったからである。

このような試みをはじめとしていくつかの展開を経て、1990年代になると社会学のあり方は大きく変化した。グローバル化論、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究が流行した。加えて、移民・移住研究が盛んになり、人文社会科学における国民国家の脱構築が進み、脱領域化、トランスナショナリズム、ネットワーク社会、移動、ハイブリディティなどさまざまな視点が提出され、現在にいたる。

2. 国際社会学の展開と関根ゼミ

さて、小倉充夫氏はアフリカを専門とした地域研究といったスタンスを大切にされていた²⁾。それに対し、梶田孝道氏は理論派で、さまざまな研究者を集めてまとめる能力に長けていた。国際社会学研究会をほぼ毎月の土曜日に定期的で開催され、海外の諸事例を研究する社会学者がさまざまな大学から集まっていた。

関根政美さんと私がお会いしたのは、そのような研究会においてであった。1990年代前半のことである。当時の関根さんは、オーストラリアの多文化主義の研究者として知られていた。『マルチカルチュラル・オーストラリア——多文化社会オーストラリアの社会変動』（1989）の後、同テーマをもう少し広いエスニシティの角度から論じた『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』（1994）を出版されたばかりであった。国際社会学の教科書の定番となった『国際社会学——国家を超える現象をどうとらえるか』（1992）では「エスニシティの社会学」の章を担当されている。

当時の日本の社会学においては、エスニシティを専門にする研究者はいまだ少なく、ましてや大学の教育プログラムの中に導入されることはまれであった。それゆえに、関根さんの「政治・社会論特殊研究」には、エスニシティに関心を寄せた多くの学生が集まったようである。慶応というポジションも有能な学生が集まる理由のひとつであったのであろうが、制度的に社会学と政治学の間に位置していたことも大きな要因となったのだと思う。自由な雰囲気に関根

さんの周りには、まじめな大学院生が多かったのが印象的である。

関根ゼミ出身の学生の全体像を把握しているわけではないが、本号に掲載されている 4 本の論文の著者は代表的なメンバーといえるであろう³⁾。もちろん、本企画を組織した塩原良和氏もそのひとりであることに間違いない。塩原氏は関根さんが 1990 年代に行ったオーストラリアの多文化主義の研究をより現代的な学問の枠組みのなかで引き継ぐ学風を追求した(塩原 2005)。

さて、本号掲載の論文の内容と意義を変化しつつある(国際)社会学の流れのなかで考えてみよう。まず、鈴木規子氏は「フランスにおける市民的統合と移民の動向」において、フランス革命の産物としての市民と国民の概念を概説した上で、同化主義的傾向の強いフランスにおいて、1980 年代半ばに移民二世から「相違への権利」の要求を通して、編入への共感を経て、統合の概念が展開する様子を描写している。その上で、共和国的な概念であるライシテ(非宗教性、政教分離)との衝突が目立つ状況下で、移民の市民的統合が重要な課題となった状況を考察している。市民性テストを通して市民的統合の強制が進む中、既にいる移民に対しては国家からの援助はなく自助努力に依存するのみである。鈴木氏は、ポルトガル語によるポルトガル系アソシアシオンによる選挙参加の呼びかけや銀行のサービスを通して社会的・政治的・経済的統合が成功しているポルトガル系移民の興味深い事例を紹介しながら、フランスの市民的統合とその制約について説得力のある論考を提示した。

昔農英明氏の論文「ドイツにおける市民的統合と移民組織」は、比較の観点から興味をそそる。フランスがシビック・ネーションであるのに対して、ドイツはエスニック・ネーションというような伝統的な類型は意味を失っている。ドイツにおいて移民組織の存在が受け入れ社会への統合に対してプラスに働くかマイナスに働くかをめぐるエッサーとエルバートの学説の対立を概観したうえで、そうした二項対立自体が無意味であるとするプリースの議論に依拠する。そして、移民組織と出身国との関係性、受け入れ国の政治的文脈、移民組織の相互関係などにより重層的に展開している様子を考察している。市民的統合の考え方が実施されてからも、移民組織は連邦政府や自治体と公的パートナーとして位置づけられていなかったが、インナーシティ問題を抱える都市の地域再生プロジェクトとしてモスク建設が行われることを通して公的に認められていく様子を紹介している。諸動向が結晶化しているこの事例の選択が、議論を進めるうえで効果的になっている。

ヨーロッパに関する 2 つの論文の後に、小林宏美氏の「アメリカ社会における移民の社会的統合と公教育」を読むと、そこにはアメリカ合衆国ならではの別世界が展開している。アメリカが技術経済大国としての地位を維持するために、公立学校において増え続けるマイノリティで英語能力が不十分な生徒に対して提供する教育が鍵となるという観点から、連邦政府の教育政策の変遷を考察している。今後さらに重要性を増す課題である。

上記の 3 つの論文が地域研究的な手法で書かれているのに対して、竹ノ下弘久氏の「マクロな制度編成と移民の社会経済的統合」はいささか趣が異なる。竹ノ下氏は、社会学的概念と理

論を駆使して、エスニック・グループの統合という課題に接近している。実際、本人自身、大学院時代は移民のホスト社会における統合の問題を、文化を異にするマイノリティの人々とホスト社会のマジョリティの人々との共生という観点から考えようとしていたのに対して、問いかけの仕方が多文化主義から社会階層に変化したと述べている。関心が文化から階層、職業、不平等へと移行することによって、移民の統合の見方が変化した。すなわち、移民の社会階層と経済的格差こそが移民の社会統合を考えるときの中心課題であることに気づいたという。論文では、これに影響を与える変数として、移民の出入国管理政策、移民に対する統合政策、福祉レジーム、雇用政策・労使関係・労働市場構造の4つを設定し、移民の選抜人的資本を経て、最終的に労働市場参加地位達成の説明を試みている。命題の妥当性を検討するために、アメリカ、ドイツ、スウェーデンの諸事例が比較されている。

以上の4つの論文を読んでみて、フランスとドイツの市民的統合の展開に関して比較社会的な観点から学ぶことが多かった。またヨーロッパとは異なるアメリカの独特な展開もおもしろい。加えて、地域研究とは違ったより理論的な論考はすこぶる新鮮で、社会学者として読む楽しさを享受できた。

3. 結び

国際社会学は、1990年代後半から2000年代にかけて学会や各大学における国際化のかけ声と共に進んだ。そして2010年代になると、ナショナルな学問のあり方を再考する雰囲気は、名前をかえて大学のグローバル化の流れの中で加速した。変化の必要性が強調される一方で、ナショナルな社会学のあり方が容易に変わらないのも事実である。社会学の主流の中では、日本以外の社会をフィールドとする研究者は依然少数派である。実際、そのような関心を持つ大学院生は、国際関係論、最近はグローバル・スタディーズのような研究科に在籍する傾向が強い。国際社会学というレッテル自身がそのような制度的事情を色濃く物語っていた。海外志向を持った研究者がまとまりを形成したため、社会学の主流からの距離が目立たないわけでもなかった。このような状況を考えると、国際政治、地域研究と社会学がクロスオーバーしていた慶応の政治・社会学特殊研究は、国際的な社会学を実践する理想的な制度的環境を提供していたと言えるのではないだろうか。

課題がないわけではない。フランス社会やドイツ社会の専門家というように特定の地域の専門家を育てることに意味があるのは言うまでもない。研究者個人が越境して理解した事例があるからこそ信頼のおける情報とそれに基づく知見が得られるからである。しかしながら、地域研究の枠を超えて社会学の主流に対して理論の構築を通してインパクトを与えることは意外にむずかしい。言語取得やそれぞれの地域の癖を体得するには多大なエネルギーと時間がかかるからである。それは経験した者にしかわからないであろう。それでもなお、こうした越境の経験をベースに構築した理論を通して社会学のど真ん中にインパクトを与えることが強く求められている。国際社会学が生まれて四半世紀、次なるステージへの進化を共に実現していき

いと思う。

【註】

- 1) 馬場氏の津田塾大学のゼミには他大学からも大学院生が参加していた。当時日本ではほとんど知られていなかった Glazer and Moyhihan (eds)(1975), *Ethnicity* に初めて出会ったのもそこであった。
- 2) この文脈で、関根ゼミの出身者で名前をあげたいのが、木村真希子氏である。インドのジャワーハルラル・ネルー大学に提出した博士論文は、Kimura (2013)として出版されている。ひとつの地域にインテンシブに惚れ込んで地域研究を行った小倉充夫氏の後任として津田塾大学でポストを得る形となったが、いわば国際社会学の津田スクールを継承する存在として期待したい。
- 3) 非常勤講師として三田を訪れた際に、多くの関根ゼミ生に出会ってきた。ここに紹介する以外のメンバーについて語る余裕がないのは残念である。

【参考文献】

- 馬場伸也. 1980. 『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会.
- 馬場伸也. 1983. 『地球文化のゆくえ——比較文化と国際政治』東京大学出版会.
- 馬場伸也. 1993. 「国際社会学」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学事典』有斐閣.
- Glazer, Nathan and D.P. Moyhihan (eds). 1975. *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 梶田孝道. 1992. 『国際社会学——国家を超える現象をどうとらえるか』名古屋大学出版会.
- Kimura, Makiko. 2013. *The Nellie Massacre of 1983: Agency of Rioter*. New Delhi: Sage.
- Mann, Michael. 1986. *The Sources of Social Power; vol. 1: A History of Power from the Beginning to A.D. 1760*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mann, Michael. 1993. *The Sources of Social Power; vol. 2: The Rise of Classes and Nation-states, 1760-1914*. Cambridge: Cambridge University Press; 1993.
- Mann, Michael. 2012. *The Sources of Social Power; vol. 3: Global Empires and Revolution, 1890-1945*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mann, Michael. 2013. *The Sources of Social Power; vol. 3: Globalizations, 1945-2011*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小倉充夫. 1996. 「移民・移動の国際社会学」. 梶田孝道. 1996『[第2版]国際社会学』名古屋大学出版会所収.
- 関根政美. 1989. 『マルチカルチュラル・オーストラリア——多文化社会オーストラリアの社会変動』成文堂.
- 関根政美. 1994. 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』名古屋大学出版会.
- 塩原良和. 2005. 『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社.

(よしの こうさく 上智大学)